

ピエール・ブルデュー 石崎晴己・訳
ブルデュー自身によるブルデュー
構造と実践



choses dites

pierre bourdieu

Bourdieu
Library
藤原書店

6 客観化する主体を客観化する

(……) 大学を研究対象とするということは、通常は客観化するところのもの、つまり、客観化の行為、客観化を行なう正統性が与えられる根拠となる地位、こうしたものを対象とすることでした。また同時に、この調査は、恒常的に二重の対象を持っていました。つまり一方には、素朴な対象、外見上の対象(大学とは何か、それはどのように動いているか)があり、他方では、客観化するという独特の行為、しかも、客観性と普遍性を主張する客観化という作業を行なう資格があると社会的に認められている制度・機関を客観化するという行為が、対象となっていたわけです。この研究を行なうに当たっての私の意図は、したがって、社会学的研究に関する社会学の実験の如きものを行なうこと、もしかしたら社会学は多少なりとも歴史主義的ないしは社会学主義的堂々巡りを抜け出すことができるかもしれないということ、証明すべく試みることでした。その際、社会学は、社会科学が産出される場である社会的世界について、社会科学が教えてくれるものを用いて、この社会的世界の上に、そして同時に社会科学の上

に行使されているさまざまな決定要因の効果を、制御しなくてはなりません。

客観化する主体を客観化すること、客観化する視点を客観化すること、これは、よく行なわれることです。しかし、それは、外見上はきわめて根底的でも、実際はきわめて表面的なやり方で行なわれています。「社会学者は、歴史の中に組み込まれている」などというような場合、だれもが直ちに「ブルジョワ社会学者」を考えます。言いかえれば、その「階級的立場」を客観化すれば、社会学者なりに、あるいはより一般的に、およそ文化的財の生産を行なう者を客観化したことになると思ってしまうわけです。実際はさらにその上に、文化生産の世界という特殊の利害が賭けられたこの亜世界の中の位置を客観化しなくてはならないのですが、そのことは忘れられてしまうのです。文学社会学ないしは文学社会学史、哲学社会学ないしは哲学社会学史、芸術社会学ないしは芸術社会学等々に興味を持つ者にとって、この作業がもたらしてくれるものの一つ、実際にもたらすかどうかはともかく、この作業の意図するもの一つとは、次のようなことを示すことです。つまり、ここできわめて一般的な社会学的還元主義といえるものの最も隠健な形として、ルカーチーゴールドマン流の客観化を例にとりますが、このような客観化を行なうと、文化生産を社会的世界の中で生産者が占める位置に乱暴に関係づけてしまうことになるということです。そして、これは上昇ブルジョワジーの表現である、等々、というようなことを言うわけです。これは、短絡の誤りに他なりません。つまり、その中で人びとが生産を行なう空間、すなわち私の言うところの文化生産の界というきわめて重要な媒介を暗点化して、非常に隔った二つの項を関係づけてしまうという誤りです。この亜空間もまた一つの社会的空間であり、その内部には、特異なタイプの社会的賭け金があり、外の世界で用いられる賭け金の視点から見れば、全く利害を超越

したものとの映るかもしれない利害があるのです。

しかし、ここでやめてしまふなら、多分、本質的偏りをとり逃がすことになるでしょう。そして、その偏りの根源は、所屬に由来する利害の中にあるのではありません。特異な位置に結びついた社会的決定因を越えたところに、はるかに根本的ではあるか目につきにくい決定作用があります。それは、知的態度、学者としての立場につきものの決定作用に他なりません。社会的世界を観察しようとする、われわれは、社会的世界について論じ、論じるためにそれを研究するにはそこから一步退く必要があるという事実から由来する偏りを、われわれの知覚の中に導入することになります。これは、理論主義的ないし主知主義的偏りと呼ぶことができるのですが、その本質は、社会的世界について作り出した理論の中に、その理論が理論的目差しの産出物であるという事実を組み入れることを忘れてしまふ点にあります。社会的世界について正しい科学を作り出すためには、理論を産出する（モデルを構築する、等々）と同時に、最終的な理論の中に、理論と実践のずれに関する理論を導入する必要があるのです。

ことが大学世界となると、一人の大学人が大学世界を研究するということになる、あらゆるものがこうした理論的誤りへと誘います。何故かと言うと、大学世界は、あらゆる社会的宇宙と同様に、大学世界および社会的宇宙一般についての、真理をめぐる闘争の場だからです。最もしばしば忘れられて来たことの一つは、社会的世界について語る者はだれでも、社会的世界においてはだれもが社会的世界について語るのだ、しかも、この世界に関して最後の言葉を持つ（議論に勝つ）ために語るのだ、という事実を考慮に入れなければならないということです。要するに、社会的世界とは、社会的世界に関する真理をめぐる闘争の場である、ということなのです。侮辱の言葉とか、人種主義的烙印等々は、アリストテ

レスの言葉を借りるなら、いずれもカテゴレマ^{*}です。つまり、公然たる告発であり、社会的世界に関する普遍性を、従って権威を主張する、指示の、命名の行為なのです。大学という宇宙は、今日、われわれの社会にあって、大学の下の評決は、確かに最も強力な社会的評決に教えられるという特異性を持っています。学校の称号を授与する者は、知性の証明書を授与することになるわけです（おまけに称号に対して距離をとることもできるというのは、称号を持った者の特権の一つです）。

社会という宇宙は、社会的世界とは何かを知るための闘争の場です。大学もまた、社会的世界（ならびに物質世界）に関する真理を述べる委任を社会的に受けた大学というこの宇宙の中で、だれが現実（ないしは個別・特殊的に）真理を述べる資格を持っているかということをめぐる闘争の場なのです。この闘争は社会学者と法学者を対立させますが、さらに法学者同士、社会学者同士をも、それぞれ対立させるのです。社会学者としての限りで介入するということは、明らかに、この闘争の中に裁定者、判定者として乗りこみ、是非を配分するために社会科学を用いるという誘惑にかられることではありません。言いかえるなら社会科学を不断に脅かす主知主義的・理論主義的誤り（民族学の場合は、「私の方が、現地人よりも、現地人が何者かをよく知っている」とうそぶくような構造主義的誤りということになります）は、社会学者でありながら、ということは、真理をめぐる闘争の競技場に登録されていないながら、この世界の真理とこの世界に関する相対立する視点の真理を述べることを自らの計画とした者にとって、この上ない誘惑であったのです。

始めに申しましたように、私は最初から、対象にはかりでなく、対象に働きかける作業そのものにも注意を払うということを、ほぼ意識的な計画として自分に課したわけですが、そのことがこのような誤

りから私を護ってくれたと思います。私がやろうとしていたのは、社会学者の特殊な位置（その自己形成、称号、免状、等々に鑑みて）の客観化と、この位置につきものの誤りの可能性の自覚とを頼りに、できる限り社会的決定を免かれることができるような作業を行なうということでした。単にこの世界の真理を述べるだけでなく、この世界が、この世界の真理を述べるための闘争の場であることを言わなくてはならない、私自身が発点において持っていた客観主義、そしてその客観主義が内に隠し持っていた、競争者を客観化することによって粉砕してしまおうという誘惑は、誤りを、それも技術的誤りを生み出すもたどということを見しなくてはならない、こうしたことは分っていました。今、技術的、と言いましたが、それは、科学的研究と単なる省察のみから成る研究との違いを示すものです。科学的研究においては、今私が言ったことは、全く具体的な操作、対応関係の分析の中につけ加える変数、導入する判断基準、等々といったものに表われるのですから。

皆さんは、こうおっしゃるでしょう。「それにしても、お前は全然対象の話をしなないじゃないか。大学人とは何か、大学とは何か、それはどう動くのか、どう機能しているのか、といったことを言わないじゃないか」と。詰まるところ、私は、この本（『ホモ・アカデミクス』）の研究対象についてお話しするつもりはなかったのです。私がやろうとしたのは、この本について、読解への手引であると同時に、自然発生的読解を防ぐための保障ともなるような、そういう談話をするということなのです。この本は、いざ刊行というときになって、他のどの本よりもはるかに多くの問題を私につきつけました。自分が言ったことを制御し切れなくなる著しい危険というものは、いつでもあるものです。プラトンの第七書簡^{*}以来、だれもがそのことを述べて来ました。私は、次のような恐れを非常に強く実感したのです。すな

わち、読者（私の書いたものからすれば、八〇％は大学人です）がこの本の読書にこめる関心がきわめて強く、そのため、そのような関心を破壊し、そのような関心の効果を破壊し、さらには前以ってそのような読解を破壊するために私が行なったあらゆる努力は一扫されてしまい、人びとは単に「自分は図表の中のどこに位置するのか？ これこれの人物について彼は何を言っているか？ 等々」とのみ自問し、世界の内部での闘争を客観化し、同時にこの闘争を制御する力を読者に与えることを目指した分析を、この界の内部での闘争のレベルにまで引きずり下してしまふ、こうした恐れです。

あるいは皆さんは、「そんなことが、何になる」と、いぶかるかも知れません。この疑問は全く正当です。「それじゃあ、芸術至上主義と同じことじゃないか、科学の科学自身に対する、自己満足的でいささか退廃的な、反省的回帰ではないか、等々」という具合に。もちろん私はそうは思いません。私は、この努力には科学的効力があると思いますし、社会諸科学にとって、「知的生産を行なう」生産者を作り出す生産というものの社会学的分析は、是非とも必要なものだと思います。皆さんの多くは、社会学に、預言的・終末論的機能を認めていらっしゃるわけですが、そうした方を驚かせ、期待を裏切ることになるのは承知の上で、私は、このような種類の分析は、臨床的、さらには治療的機能もまた持ちうるかもしれないと、つけ加えたいと思います。社会学とは、一人一人に、自分自身を作り出した生産の社会的諸条件と、社会的世界の中で自分が占める位置とについて理解を与えることによって、自分が何者であるかをよりよく理解することを可能ならしめる、きわめて強力な自己分析の用具なのです。これはおそらく、全く期待を裏切るような定義で、皆さんが普通抱いている社会学観とは全然違ったものでしょう。社会学は、政治的機能等の他の機能も持つことはできるでしょうが、今述べたこの機能については、私

はより確信を持っています。その結果、この本はある形の読解を促すことになります。これを風刺攻撃文書として読んではならないし、自罰のために使用してもならないのです。何しろ社会学は、他人を鞭打ったり、自分を鞭打ったりするために使われすぎます。実は、こう言わなければならぬのです。「私はこの通りの者だ。それは誉めるべきことでも、責めるべきことでもない。ただ、そのことは、当然の帰結として、あらゆる種類の性癖を予想させるものだし、社会的世界について論ずる場合には、あらゆる種類の起りうる誤りを予想させる」。こうしたこと一切を言うことは、ほとんどお説教すれすれになってしまいます——私はお説教というのが大嫌いです——が、それでも言っておかねばなりません。何故なら、もし私の本が風刺攻撃文書として読まれるとしたら、この本は私にとって嫌悪すべきものになってしまい、いっそ焚書にされた方がまだからです。

7 宗教的なるものの拡散

私の役割は、おそらく、結論を下し、終了を告げ、終止符を打つということであるよりは、新たな出発点を指し示すことです。私はこれから一連の半ば即興的な疑問を提起していきますが、それらの疑問はことを紛糾させるかもしれません。しかし、われわれの討論の真の原理に立ち帰るためには、それは不可欠であると思います。というのも、この問題へのわれわれの取り組みの基盤にある諸々の定義を疑問に付すことが必要であると私には思えるのです。実際、本日提案された主題「『新たな聖職者』」は、部分的には妥当性を欠くのではなかったでしょうか。「新たな聖職者」というような言い方をする必要があったでしょうか。場合によっては、私の最初の反応は、このような言葉つかいは危険だと述べることである、ということになったかも知れません。しかし、このような概念の混乱は、聖職者という語を、僧侶という普通の意味でとらえるきわめて狭い定義から、きわめて幅広くきわめて漠然とした定義へ向かうことを可能にしてくれるものであって、この混乱そのものが関数として機能するものであることが

訳者紹介

石崎晴己 (いしざき・はるみ)

1940年東京に生れる。

1969年早稲田大学大学院博士課程単位修得。

現在青山学院大学文学部教授。

専攻はフランス文学。

著書に『フランス小説の現在』(共著)高文堂, 1982年, 『フランスの文学』(共著)有斐閣, 1984年。訳書にトゥレーヌ『行動の社会学』(共訳)合同出版, 1974年, ロットマン『伝記アルベール・カミュ』(共訳)清水弘文堂, 1982年, セリーヌ『戦争, 教会——セリーヌの作品・第14巻』国書刊行会, 1984年, カレル・エダダンコース『ソ連邦の歴史Ⅰ——レーニン: 革命と権力』新評論, 1985年, サルトル『奇妙な戦争——戦中日記』(共訳)人文書院, 1985年, ボスケッティ『知識人の覇権』新評論, 1987年。

構造と実践 (ブルデュー自身によるブルデュー)

1991年12月30日 初版第1刷発行©

訳者 石崎晴己

発行者 藤原良雄

発行所 齋藤原書店

〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町518番地

早稲田玉井ビル

電話 03(5272)0301

FAX 03(5272)0450

振替 東京 6-17013

印刷 イフ・フォーラム 製本 河上製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバーに表示してあります

Printed in Japan
ISBN4-938661-40-3

〔付〕3 ピエール・ブルデュー著作目録

(Y. Delsaut 女史作成の著作目録に基づく)

〈著書〉

- 1958 *Sociologie de l'Algérie*. Paris, P. U. F., Coll. "Que Sais-je", n°802, 1958, nouv. éd. revue et corrigée, 1961.
- 1963 *Travail et travailleurs en Algérie*. Paris-La Haye, Mouton, 1963 (A. Darbel, J. P. Rivet, C. Seibel と共著).
- 1964 *Le déracinement, la crise de l'agriculture traditionnelle en Algérie*. Paris, Ed. de Minuit, 1964 (A. Sayad と共著).
- *Les héritiers, les étudiants et la culture*. Paris, Ed. de Minuit, 1964, 増補新版 1966 (J. C. Passeron と共著).
- *Les étudiants et leurs études*. Paris-La Haye, Mouton, Cahiers du centre de sociologie européenne, 1, 1964 (J. C. Passeron と共著).
- 1965 *Un art moyen, essai sur les usages sociaux de la photographie*. Paris, Ed. de Minuit, 1965, 改訂新版 1970 (L. Boltanski, R. Castel, J. C. Chamboredon と共著).
- 1966 *L'amour de l'art, les musées d'art européens et leur public*. Paris, Ed. de Minuit, 1966, 増補新版 1969 (A. Darbel, D. Schnapper と共著).
- 1968 *Le métier de sociologue*. Paris, Mouton-Bordas, 1968 (J. C. Chamboredon, J. C. Passeron と共著).
- 1970 *Zur Soziologie der symbolischen Formen*. Francfort, Suhrkamp, 1970, Suhrkamp Taschenbuch Wissenschaft, 107, 1974.
- *La reproduction. Eléments pour une théorie du système d'enseignement*. Paris, Ed. de Minuit, 1970 (J. C. Passeron と共著).
- 1971 *Mitosociologia, contributi a una sociologia del campo intellettuale*. Bologne-Florence, Guaraldi Editore, 1971 (J. C. Passeron と共著).
- *Sociologia franceză contemporană*. Bucarest, Ed. Politică, 1971.
- *Die Illusion der Chancengleichheit*. Stuttgart, E. Klett Verlag, 1971 (J. C. Passeron と共著).
- 1972 *Esquisse d'une théorie de la pratique, précédé de trois études d'ethnologie kabyle*. Genève, Droz, 1972.